感情表現の体系について

A System of Feeling Expressions in Japanese Language

小　出　慶　一*

KOIDE Keiichi

１．はじめに

1-1　問題の所在

この稿で取り上げる問題は次の３つである。

①感情表現のためには、いくつかの形式があるが、形式によって違いはあるか、あるとすればどんな違いか。

②感情には、その表現に複数の形式を持つものもあるが、まったくもたないものもある。表現形式の多寡と感情の性質との間に何か関係はあるのか。あるとすればどんな関係か。

③感情表出に用いられる形容詞は、意味用法の拡張の幅が小さい。これはなぜか。

この３つの問題の検討を通して、感情というものを日本語がどう捉えているか、感情とはどんなものとして捉えられているかを考えてみたい。

この３点について、簡単にその内容を述べると次のようになる。

まず、①であるが、たとえば、「怒り」は、次のような語・句によって表現される。

１ａ．いまいましい（形容詞）

ｂ．かっとする　（擬情語）

ｃ．腹が立つ　（身体語表現）注1

１のａ～ｃは「怒り」を表現するものであるが、それぞれが表す内容は同じなのか。それぞれの違いはどんなことか。これが①の問題である。

なお、１ｂの「かっとする」など、「擬態語＋動詞」という形で表されるものは、以下、「擬情語」という金田一（1978）の用語を用い、１ｃのような身体語を含む表現は「身体語表現」と呼ぶことにする。

②は、たとえば、「怒り」は１のような３つの表現形式を持つが、「悲しみ」は「悲しい」という形容詞を持つだけであり、「誇り」はそれを表す語が存在しない。さらに、そもそも名前のない感情もある。ヒトの心は常に感情によって満たされている（山鳥 2008）のだとすれば、感情には無数のものがあるのかもしれない。形式を多く持つ感情、形式のない感情とはどのようなものか、形式の多寡に意味があるのか、という問題である。

③は、感情形容詞は、たとえば「悲しい」は、ほとんど意味の拡張をしない。これは、他領域の形容詞とは大きく異なる点である。たとえば、「甘い」（味覚）、「高い」（次元）は、「甘い処分」「高い評価」など、他領域の表現に使われてい

* こいで・けいいち
埼玉大学教養学部教授，日本語教育

る。なぜ、感情形容詞は意味拡張をしないか、という問題である。

以上が本稿の課題であるが、これらの関心のおおもとは、ヒトにとってことばとは何か、というところにある。ヒトとことばの関係を、感情というヒトに近しいものを通して考えようというのが本稿の目的である。

1-2　先行研究との関係

これまで感情表現については、個々の表現の意味の違い（倉持 1986、馬場 2001 など）、感情形容詞や動詞を述語とするものの主語に対する制約（山岡 1999、大曽 2001 など）、あるいは、身体語で表される感情（楠見・米田 2007 など）について論じられてきた。これらの研究の積み重ねによって、ことばと感情の関係が少しずつ明らかになってきたわけだが、本稿はこれらの蓄積の上に立って、感情とそれを表現する形式との関係を全体的に検討し、そのことによって、ヒトと感情との関係を総体的に把握しようとするものである。

２．対象――感情と表現形式

2-1　対象とする感情表現の形式

本稿で対象とする感情表現形式とは、２に示した６種である。

２ａ．おお、こわい。　（形容詞）
　ｂ．ああ、困った。　（動詞）
　ｃ．もう、いらいらする。（擬情語）
　ｄ．うーん、腹が立つ。　（身体語表現）
　ｅ．うーん、残念だ。　（形容動詞）
　ｆ．ああ、気がとがめる。（「気」表現）

これらのほかに、たとえば、次のような表現も一種の感情表現である。

３ａ．ふざけるな。（怒り）
　ｂ．サイコー。（感激）
　ｃ．終わった。（安堵）
　ｄ．やったー。（達成）

しかし、ここで扱うのは、感情そのものをメタ的に指す表現である。「ふざけるな」は、怒りを伴った表現であるが、怒りに伴って現れた表現であり、感情そのものを指しているわけではない。これに対して、「こわい」「困った」などは、感情の内容を言語的に表すものであり、一種のメタ表現である。このようなメタ的な表現を対象とする。

2-2　感情表出表現の文法的な性質

また、この稿で扱う感情表出表現は、４に示す文法的な性質を持つものとする。このような条件に合った表現を、この稿では、山岡（1999）にならって、感情表出表現と呼ぶことにする。

４ａ．話者の発話時点での心的状態を表わす。
　ｂ．話者以外が経験者にはならない。
　ｃ．経験者は、文中に表示されない。表示すると不自然な文になる。

このうち、４ｃは必ずしも一般的な見解ではない。「私はこわい」のような文が表出文としても成立するとする先行研究もある（たとえば山岡 1999）。しかし、２の各文に「私は」という経験者を加えると、２´に示すようになるが、筆者には不自然な文に感じられる[1]。描写としては成立するが、表出として成立しないのではないかと思われる。また、少なくとも、国語研「少納言」の用例には、「私はこわい。」「私は困った。」の例はない。

２´ａ．私は、こわい。帰ろうよ。

b．ああ、私は困った。

c．まったく、私はいらいらする。

d．うーん、私は腹が立つ。

感情表出というものは、発話の場とともに成立するものであり、表出性が高いほど、主語などの文法的要素は必要とされなくなるのだと思われる。主語を表示することは、現場性、表出性を弱めることになると思われる。反対に、経験を語るならば、次の例のように、「私は」があっても不自然にはならない。

５ａ．雷になれていない私はめっちゃ怖い。（（Yahoo!ブログ, 2008, Yahoo!ブログ）

ｂ．私は困った。（家永三郎ほか編『日本の原爆記録』, 1991, 369）

このようなことから、３ｃの条件も感情表出表現の規定に含めておくことにしたい。

2-3. 感情の種類について

さて、この稿の関心のひとつは、どのような感情がどのように表現されるかということであるので、できるだけ多くの感情を扱うことが望ましいが、そもそもどのような感情を認めるかという点について定説があるわけはなく、網羅的な検討は困難なところがある。

その中で、文化を超えてヒトが共通に持つものとして、基本感情というものの存在を認めようとする立場がある。ダーウィン（1872）の発想を大平（2010）は次のようにまとめている。

６．典型的な感情は、環境からもたらされる挑戦に対して生じるさまざまな反応の内、生活体の生存確率を高める反応である。（p.57）

この「典型的な感情」を発展させたものが基本感情である。

７．感情には基本感情が存在するという考え方は、基本的に新ダーウィン主義の考えにもとづいている。つまり、各感情は人間が生存していくうえで必要であるため、進化の過程を経て残って来たものであるとする考え方である」（濱ら 2001：32）

ただし、ここでも、何を基本感情とするかという点についても定説はないようであるが、濱ら（2001）によれば、その中でも比較的多く挙げられるのは、「怒り、恐れ、驚き、嫌悪、喜び、悲しみ」であり、それに対して、「憎しみ、不安、羞恥」など含める研究者は少ないということである。また、古くデカルト（1659）などは「愛」を基本感情に含めていたが、現代では、「愛」の代わりに、「喜び」「幸福」などが挙げられるという。

そこで、この稿では、感情を網羅的に列挙することは求めず、上に挙げた６つの基本感情に、濱ら（2001）、戸田（1992）が挙げている感情を適宜加え、検討することにした。それが、次のものである。

８．怒り、恐れ、驚き、嫌悪、喜び、悲しみ、苛立ち、感動、心配、不安、憂鬱、同情、罪悪感、面倒、鬱屈、落胆、期待、残念、不快、拒否、憎しみ、悔やみ、恨み、軽侮、煩雑、羨み、恥、照れ、不審、寂しさ、だるさ、楽しみ、祝賀、感謝、名残、可愛い、懐旧、困惑、呆れ、降参、諦め、愛、幸福感、報恩、誇り、恩義、甘え、ひがみ、加罰、復讐、信頼、絶望、尊敬

３．感情表現の分布

８に挙げた感情が、どのような品詞・句で表されるか検討し、そのパタンによってＡ～Ｅの５類に分けたのが９である。

９．感情表現のグループ分け

Ａ：形容詞による表現を持つ類。形容詞と形容動詞２つの分布が重なることはない。

Ｂ：形容詞は使われず、形容動詞が使われる類

Ｃ：形容詞・形容動詞は使われず、擬情語で表される類

Ｄ：動詞のみで表される類

Ｅ：特定の語あるいは句による感情表出表現を持たない類

Ａ～Ｃについては、さらに分布によって下位分類を加えた。表１の通りである。表中の感情例は、紙幅の都合で１～２例にとどめた。また、感情区分とそこに含まれる形容詞、擬情語との対応付けは、飛田・浅田（1991）、飛田・浅田（2002）、尚学図書（1991）、戸田（1992）、『明鏡第二版』などの記述を参考に行った。

なお、このような整理を行った目的は、分布の様子を把握するためであり、Ａ～Ｅ類ごとに記述を行おうとするものではない。

また、表のＡ１という区分は「怒り」「恐れ」などの感情を含み、「形容詞」「擬情語」「身体語」の表出が可能なものである、ということを意味する。

表１　感情とそれを表す語

類	形	形動	擬情	動	身体	気	感情例
A1	○	－	○	－	○	－	**怒り・恐れ**
A2	○	－	○	－	－	－	苛立
A3	○	－	－	－	－	－	**喜び・悲しみ**
A4	○	－	－	－	－	○	同情・罪悪感
B1	－	○	○	－	－	○	不安・心配
B2		○					不快・残念
C1	－	－	○	○	○	－	**驚き**
C2	－	－	○	－	○	－	**嫌悪**
C3	－	－	○	－	－	－	落胆・期待
D	－	－	－	○	－	－	困惑・降参
E	－	－	－	－	－	－	愛　・誇り

＊表の略号の意味は次の通り。形：形容詞、形動：形容動詞、擬情：擬情語、動：動詞、身体：身体語による表現、気：「気」という語を使った表現

４．感情を表す形式について

この表１の分布に基づいて、以下、それぞれの形式の特徴を、擬情語、身体語、動詞、形容詞、形容動詞、「気」表現の順に検討する。

4-1　擬情語で表される感情

擬情語で表される感情とはどのようなものだろうか。比較の意味で、擬情語で表されない感情を併せて挙げる。10 が擬情語で表せるもの、11 が表せないものである。

10. 恐れ、驚き、怒り、苛立ち、嫌悪、不安、鬱屈、落胆、感動、喜び、期待

11. 懐かしさ、可愛さ、寂しさ、不審感、羨ましさ、不快さ、恥

10、11 を比較してみると、擬情語で表される感情（10）は、身体の生理的な変化のあるものと言えそうである。例を挙げる。

12. 感情と身体的な反応

a．「かっと」（怒り）　血圧の上昇

b．「ぎょっと」（恐怖、驚き）呼吸の停止

c．「むかむか」（嫌悪）　吐き気

d．「どきどき」（期待）　心拍数の増加

このようなタイプの感情は、情動と呼ばれるものであり、次のように説明される。

13. 原因が明らかで、はじめと終わりがはっきりしており、しばしば生理的覚醒を伴うような強い感情。（大平 2010：6）

情動は、持続時間でも特徴がある。濱ら（2001）は、持続時間と感情のタイプの関係について次のような区分を示している。

14. 感情と時間
情動：秒ないしは分単位での現象。一過性の急激な表出や自律反応系の変化を伴って生じる現象。
感情（狭義）：数時間あるは日の単位の現象
気分：数日から数週間の単位で持続する現象。（濱ら 2001：3）

また、擬情語の表わす情動の短時間性は、擬情語の形式にも反映されている。擬情語の主な形式は金田一（1978）などによれば次のようなものである。

15 a．ABAB 型：コトガラの反復、継続。
＜どきどき、いらいら、むかむか＞
b．AB ッ型／A ッ型：感情の瞬間的生起。「ッ」は途中停止。
＜ひやっ、どきっ、ぎょっ、かっ、＞
c．AB ン型：感情の瞬間的生起。「ン」は音を伴うことを示す
＜かちん、どきん、じーん＞
d．AB リ型：感情の瞬間的生起。「リ」は全体の停止を表す。
＜ひやり、どきり＞
e．A ッ B リ型：感情の生起。「ッ」は途中停止、「リ」は全体の停止を表す。
＜びっくり、どっきり、がっかり＞

15 a の ABAB 型は反復を表すが、それ以外の 15 b ～ e の４つの型は、変化を表わすものである。

しかし、変化の時間性には異なりがあり、15 の b → c → d → e の順に時間は長くなりうる。

「AB ッ」型がもっとも時間的スパンが短いものであろう。

「AB ン」の「ン」は音を伴うこと、「AB リ」の「リ」は、変化が「停止」に至ることを示す。したがって、生起から停止までの過程が意識されるわけだから、「AB ッ」型より、長い時間が意識されることになる。その結果、観察的な記述になる可能性が生じ、描写的になる傾きを持つことになる。

「A ッ B リ」が時間的にはもっとも長いものと思われるが、また、「と」の介在が必要ないという特徴をもつ。これは、引用性が低いということであり、具体的な感情の喚起力が弱くなるということでもあると思われる。

4-2　身体語で表される感情

次に、身体語を使った感情表現の性質を見る。身体語で表出可能な感情は、擬情語より範囲が狭く、本稿の収集範囲では、次の５種の感情である。（擬情語は 10 種だった。）

16 a．（怒り）頭にきた、腹が立つ、癪に障る
b．（恐れ）鳥肌が立った、足がすくんだ
c．（驚き）肝を冷やした、心臓が止まりそうになった
d．（嫌悪）吐き気がする
e．（感動）胸が締め付けられる

これらの感情は、擬情語でも表わすことがで

きる。

しかし、次の 17 に挙げた感情は、擬情語では可能だが、身体語では表せない。身体語で表現されるものは擬情語でも表現可能であるが、その逆は必ずしも成立しないということである。

17 a．（苛立ち）　いらいら、やきもき、じりじり
　b．（心配・不安）はらはら、どきどき
　c．（鬱屈）　むしゃくしゃ
　d．（落胆）　がっかり、げっそり
　e．（期待）　わくわく、どきどき

17 の擬情語の特徴は、ABAB 型、つまり、反復・継続型になっていることである。それに対して、16 の感情は、瞬間的に生起するものである。

つまり、身体語で表現される感情は、情動的なもので瞬間的生理的変化が感じられるものであり、持続的反復的なものではないということになる。

4-3　感情動詞で表される感情

次に、感情動詞で表出される感情の性質について見てみる。

感情動詞とは次のようなものである。

18. 困った（困惑）、呆れた（唖然）、まいった（降参）、諦めた（諦め）

これらの感情がなぜ動詞によって表されるのか。

18 の表現には、ある共通性がみられる。それは、当のコトガラに対して、どうしていいかわからない、なす術がないという感情の表出であるとともに、そのような事態が突然現出し、その認識が今成立した、ということを表わすという点である。

「困る」「あきれる」などは、いわゆる瞬間動詞であり、「困った」「あきれた」は、結果状態というアスペクトを表わすものである。「どうしていいかわからなくなった」という瞬間的な心的状態の変化とその結果状態が、「困った」「あきれた」で表わされているわけである。

このような認識状態の変化は、形容詞では表せない性質のものである。「困った」「あきれた」は、たまたま心的な内容を持つ語であるというだけで、結果状態の残存を示すという点では他の瞬間動詞と同じである。

このように変化の結果状態を表現するというところに、動詞による感情表出表現の役割があるのではないかと思われる。

4-4. 形容詞で表わされる感情

次は、形容詞で表わされる表出表現。表出に使われる形容詞は次のようなものである。

19. おそろしい、かなしい、うらめしい、ばかばかしい、うっとうしい、おかしい、さびしい、はずかしい、かわいい

結論から言えば、表出的に用いられた形容詞の機能は、現在心を満たしている感情を表現する、ということだろうと思われる。擬情語、身体表現、動詞が、時間的な推移を背景に持った過程的アスペクト的な捉え方をするのに対して、心の状態そのものを焦点化した表現で、非時間的非過程的な捉え方をするのが感情形容詞のだいじな機能である。

20 a．こわい
　b．ぎょっとした

どちらも「恐怖」を表出する表現ではあるが、

時間的な位相は異なっている。擬情語では、今現在の感情は表わせない。恐怖の感情の残存が表わされるだけである。だから、「おどろき」のような瞬間的変化によって生起する感情には、形容詞は使われないのである。それに対して、形容詞は今現在の感情を名付けることによって、メタ的に捉えようとするものである。

4-5　形容動詞で表される感情

21 は形容動詞で表される感情である。形容動詞による表出はそれほど多くはない。

21. 不安だ、心配だ、憂鬱だ、面倒だ、かわいそうだ、不愉快だ、残念だ、無念だ

これらの形容動詞に共通する意味的特徴は、好ましい状態ではないという点である。好ましくないということは、可能ならば、その状態から逃れたい、あるいは、その状況を改善したいということであるが、どちらの場合も、そのための行動を起こすほど強い感情でもないということである。

このような意味が、形容動詞によって表わされることになったのは偶然なのか、それとも何か本質的な理由があるのか、興味深い問題であるが、本稿の守備範囲を超える問題であり、別の機会に譲りたい。ここでは、形容動詞が共通のニュアンスを持ったものになっているということを指摘するにとどめることにしたい。

4-6　「気」を使った感情表現

「気」を使った表現（以下、「気」表現）は、次のようなものである。

22. 気が重い、気の毒だ、気が乗らない、気が進まない、気がめいる、気が抜けた、気がさす、気になる、気がひける、気が咎める、気にくわない、気にかかる、気が晴れない、気が済まない

「気」表現が、他の感情表現と異なる点は、表現の指示対象が違うという点である。

「気」表現は、感情の内容ではなく、「気」の状態について述べるものである。「不安だ」は感情の内容にラベル付するものであるが、「気が重い」は、「気」の様子を示すだけで、その内容（感情の内容）は示していない。

そのため、「気」表現で表される感情には、特定の名前が付かないものが多い。22 の表現のうちでも、その感情に名前のあるものは多くない。

また、内容的な面から見れば、「気」表現で表出される感情は、形容動詞と同様、好ましい状態ではないものが多いように思われる。対象や状況に対して、「気」が展開せず、いわば停滞した状態、解放されない状態に置かれた状態が表現されているように思われる。「気」が停滞した状態は、中国伝統医学では病気の起こりやすい状態とされるようであるが、日本語の表現としても、好ましくない状態を表していると言えよう。

そして、これも形容動詞と似た点であるが、情動的なものでなく、ある期間保持される状態的な感情が表される。

4-7　感情語で表現されない感情

最後に、感情表出語を持たない感情について見てみよう。８で挙げた感情の中で、特定の感情語・表現を持たないのは、次のような感情である。

23. 愛、誇り、恩義、甘え、加罰、復讐、信頼、絶望、尊敬、ひがみ

これらは、情動型の感情ではないので、特定

の身体的な反応を持たない。また、これらの感情は、形成の過程も長く、また、保持も長いとすれば、感情の瞬間的なインパクトというようなものとは遠くなる。そのために、その感情を今現在感じているということを表現する語が形成されなかったのかもしれない。

これらの感情は船の浮かぶ海のようなものであり、情動性の高い感情が船を揺らす風であったり、大波であったり、そういう特別な、意識されやすい性質のものであるのと、異質の性質を持った感情なのではないかとも思われる。

が、これは比喩に過ぎない。今後、検討されるべきことだろうと思われる。

５．考察

5-1　感情を表す諸形式の特徴

ここまで､感情を表す形式の特徴を見てきた。それぞれの形式の表す感情を対比的にまとめると次のようになる。

24. 各形式が表す感情の性質

擬情語：心の瞬間的な動きを表す情動性の感情

身体語：心の瞬間的な動きを表す情動性の感情

形容詞：心の非時間的な状態としての感情

動詞　：心の状態変化の結果としての感情

形容動詞：不本意な状況に置かれた際の心の否定的状態としての感情

「気」表現：「気」の様子・動きとして捉えられた感情

これらは、アージ性という観点から見ると、次のような階層に分かれる。おおづかみに表わすと、３つの階層に分けられる。(アージについては次節で述べる。)

25. ｛擬情語・身体語｝（情動性感情ラベル）

↓

｛形容詞・動詞・形容動詞｝（状態性感情のラベル）

↓

｛「気」表現｝（「気」の様子を示すラベル）

5-2　表現形式を多く持つ感情――「アージ」論との接点

３節の表１に見られるように、「怒り・恐れ・驚き」は表現形式を多く持つという点で特異なものだった。これは、この３つの感情が特異なものだからなのだろうか。

感情をどう捉えるかについては、長い研究史があるが（濱ら 2001、山鳥 2008 など)、現代の感情研究の出発点となり、また現在でも有力な考え方の一つとして、先に挙げたダーウィン学派の考え方がある。この考え方をさらに深め、個々の感情について詳細な記述を試みたものに戸田（1992）がある。戸田の感情についての説の要点を挙げると、次のようになるだろう。

26 a．感情は野生環境の特徴に適合した適応行動選択システムとして高度の合理性を持ったものである（野生合理性)。

b．(感情は) 状況に応じての適応行動選択機構として非常に精巧な心的ソフトウエアになっている。

c．このような心的ソフトウエア（野生環境を背景として、遺伝的に基本枠が設定された行動選択、実行用のソフトウエア）は、従来の「感情」を超えたものであるので、アージ・システムと呼ぶ。26、27 の記述は、戸田 1992 : 25-29 に基づく。)

ここで重要な概念はアージというものである

が、アージのほかに、いくつかの感情のあり方が設定されている。この稿で挙げた感情がどこに区分されているかを（　）内に例示する。

27. アージ：認知された外部状況に応じて適応行動を選択実行する働き。「感情」と呼ばれるものの大部分。
（怒り、恐れ、驚き）
ムード：アージ起動条件を満たさないが、ある一定の状態に設定された心の状態。仲間に伝染する。
（喜び、悲しみ、落込み、不安）
評価的態度：アージでもムードでもない、個別対象に対する感情的態度。長期にわたって比較的安定している。（好き、嫌い、憎い、誇り）
待機的態度：あるアージが実行不可能状態であるとき、実行可能になるまでの状態。
（「怒り」が実行不可能なら「憎しみ、罪悪感」、「感謝」なら「報恩」）

アージに区分されているものは「怒り、恐れ、驚き」だけではないが、感情を「野生合理性」を持つものという規定からすると、この３つの感情がもっとも重要なものであることは間違いない。この稿で示した「恐れ、怒り、驚き」の形式の多さも、おそらくこのような背景があるからだろうと思われる。

また、感情が行動を起動しうるということは、その感情が、特有の情動を伴うなど、他の感情との境界が明瞭だということでもあろう。これは、先に挙げた、感情語を持たない「愛・誇り」などの感情と大きく異なる点である。「愛・誇り」はヒトにとって重要ではあるが、生命維持という点での緊急性は低い。

「怒り、恐れ、驚き」が、なぜより多くの表現形式を持っているかということを捉えるには、このアージというような概念が有効だろうと思われる。

また、「喜び」「悲しみ」を基本感情とする先行研究が多いと先述したが、この２つの感情を表現する語は形容詞だけで、限られたものである。それは、「喜び・悲しみ」が、「怒り」などとアージ性という点で異なるからだと考えれば、言語現象と整合的に解釈ができるようにも思われる。戸田のこのような感情区分は、ことばと感情の関係を考えるために、重要な手がかりになると思われる。

5-3　感情形容詞の意味拡張――なぜメタファーを持たないか

最後に、いくつかの感情表出形容詞について、その意味の広がりの特徴について考えてみたい。感情形容詞の意味拡張がほとんどないという問題である。

この稿で検討した感情表出形容詞は 28 に示したものであるが、これらのうち、『明鏡』『新選』２つの辞書で、ともに複数の語義が挙げられているものは、28ａの９語だった。ｂの形容詞はすべて単義扱いである。

28ａ．おそろしい、かなしい、うらめしい、ばかばかしい、うっとうしい、おかしい、さびしい、はずかしい、かわいい、
ｂ．こわい、いまいましい、はらだたしい、うれしい、いらだたしい、まだるっこしい、じれったい、もどかしい、もうしわけない、すまない、めんどうくさい、うとましい、にくらしい、くやしい、うらやましい、ねたましい、てれくさい、きはずかしい、おもはゆい、たのしい、なごりおしい、なつかしい

この 28 a のうち、「おかしい」は多義とすべきだと思われるが、他の語は、複数の語義があっても、ごく狭い範囲での広がりがあるだけである。たとえば、「かなしい」「ばかばかしい」の記述は次のようになっている。

29 a．「かなしい」（『明鏡』

1 心がひどく痛んで泣きたくなるような思いがする、また、そのように思わせるさま。

「私は友の死が――」

2 情けなくて残念な思いだ。また、そのように思わせるさま。

「こんな簡単なことができないなんて、――」

d．「ばかばかしい」

1 きわめてばかげているさま。

「――くて聞いていられない話」

2 程度がはなはだしいさま。

「――高値をつける」

ここに記述されている２つの語義は、別義とするほどの意味の違いがあるか、微妙なところだろう。

たとえば、「かなしい」の２つの用例は、それらの語で捉えられる範囲が少し広がっただけとも言える。その状況、対象に対する話者の感情は、変わっているわけではないし、語義２でも実際に話者の中にそのような感情が弱いものではあれ起きていると思われるものである。

語義１は、プロトタイプ的であるとするとしても、語義２は、別義ではなく、「かなしい」というカテゴリーの周辺例であるだけで、プロトタイプ性が弱くなった語義と見ることもできるように思われる。

また、「ばかばかしい」の語義２の「ばかばかしい高値」は、「ばかばかしいと感じるほどの高値」という意味である。「高値という値段」とその高値を「ばかばかしい」と感じる捉え方が結びついた表現であり、「ばかばかしい」の意味が変化したわけではなく、近接関係で２つのものが結びつくメトニミー的な表現になっているだけである。

つまり、この辞書で別義とされている語義は、基本義と次のような範囲での広がりとして捉えられるように思う。

30 b．カテゴリー内周辺メンバーへの適用の広がり（「かなしい」２）

a．メトニミーによる適用の広がり（「ばかばかしい」２）

「おかしい」は別として、他の語についても、多義性は微弱であると思われる。[注2]

では、感情表出形容詞の意味が、ごく限られた範囲での広がりしか持たないのはなぜだろうか。

これまで、拡張の条件として、使用頻度の高さ、ヒトにとってのその語の意味の重要さ、というようなものが挙げられてきたが、これは、感情形容詞が拡張しないことの説明にはならない。なぜなら、まず、「こわい」などは使用頻度もそう低くはない。国語研 NINJAL によれば、「こわい」は 6510 例で、「甘い」の 4902 例より、用例数が多い。また、先述のように、感情形容詞の中には、「こわい」「おそろしい」などのように、ヒトの生存にとって重要なものもあるからである。

では、拡張の要因とはどんなものなのか。

拡張が広く見られる形容詞、「甘い」「明るい」「高い」（次元）などと何が異なるのか。

考えられるもっとも大きな違いは、味覚、視覚、次元、温度、量などを表す形容詞が捉えているものは、外界からの刺激の認知過程に現れ

てくるものであるに対して、感情というものは、外界とのかかわりで喚起されるものであるにしても、感情形容詞が捉えるのは認知過程ではなく、認知の結果引き起こされた内部状態であるということである。つまり、「甘い」は外界の対象との一定の対応関係を持った感覚であるが、「こわい」はより複合的で特定の対象との関係で起こる心的状態ではないということである。

意味拡張というものが、あるコトガラの表現を他のコトガラの表現に写像・転用することであるとすれば、そこに同型性の認識がなければならないだろう。同形であるとは、「形」であったり「機能」であることは、すでに指摘されているところである（今井 1997、松中 2005 など）が、感情形容詞の拡張が限られているのは、そこに一定の形（定形性）がないからでなはいかというのが、この稿の仮説である。山鳥（2008）の言い方に従えば、感情とは非心象的（心的イメージのない）ものだ、ということである。

「甘い」という感覚について言えば、感覚は、特定の物質が特定の細胞を刺激することによって起きるわけで、そこには一定の対応関係（形）があり、感覚が引き起こす一定の効果（機能）があり、その一定性のゆえに、他領域への転用が準備された状態にあるのではないだろうか。

この準備状態（転用可能状態）がある場合、その次に実際の転用が起こるかには、使用頻度、機能の性質さなどもが影響するのではないかと思われるが、本質的なことは、感覚というものと感情というものの違いにあるのではないだろうか。[注3] ただし、これはあくまで仮説であって、検証の必要があることは間違いない。

６．おわりに

6-1　まとめ

はじめに立てた問題①～③はつぎのようなものだった。

①感情表現のためには、いくつかの形式がある。形式によって、何か違いはあるのか、あるとすればどんな違いか。

②感情には、その表現にいくつかの形式を持つものもあれば、まったくもたないものもある。表現の形式を多く持つ感情、持たない感情の違いは何か。

③感情表出に用いられる形容詞は、意味用法の拡張の幅が小さい。これはなぜか。

これらについてどのような答えが得られたかを中心に、本稿の内容をまとめると次のようになる。

①について

この稿で取り上げた感情表出の表現形式は、６つだった。それぞれの特徴は、24 に述べた通りである。再掲する。

24. 各形式が表す感情の性質

擬情語：心の瞬間的な動きを表す情動性の感情

身体語：心の瞬間的な動きを表す情動性の感情

形容詞：心の非時間的な状態としての感情

動詞　：心の状態変化の結果としての感情

形容動詞：不本意な状況に置かれた際の心の否定的状態としての感情

「気」表現：「気」の様子・動きとして捉えられた感情

②について

感情表現は、アージ性という観点から見ると、次のような階層に分かれると考えた。

25. ｛擬情語・身体語｝（情動性感情ラベル）
↓
｛形容詞・動詞・形容動詞｝（状態性感情のラベル）

↓

{「気」表現}（「気」の様子を示すラベル）

これに加えて、感情表現としては成立しているが特定の感情名を持たないもの、感情名は持っているが語彙レベルでの形式を持たない感情も存在する。そのような感情と表現の中で、「怒り、恐れ、驚き」は際立った存在であり、また、複数の表現形式を持っている。それは、感情というものの「野生合理性」（戸田 1992）という性質に拠る、という議論は、この稿の分析と軌を一にする。

③について

感情形容詞の拡張があまり見られないのは、感情形容詞と感情との関係、表すものと表されるものの関係の不透明さに起因する。感情形容詞は、味覚形容詞のような、感覚と刺激物との対応が明確でない。そのようなコトガラの「形」の不確かさが、他領域への写像を媒介にした拡張を難しくしているのではないかと思われる。

6-2　今後の課題など

本稿の反省点のひとつは、感情の名前（種類）が必要十分に捉えられているかということであり、また、それと擬情語、身体語などの対応付けが妥当だったかということである。これらの点について、さらに手続きを明確にする必要があると思われる。感情と形式の対応付けが変われば、おのずと論旨も変わってしまうからである。

それには、個々の表現を必要十分に記述するという基礎的な作業が不可欠であることも痛感した。馬場（2001）のような記述が増えることが望まれる。

また、感情形容詞の意味拡張の問題は、単に仮説を書きとめるだけになってしまった。稿を改めてさらに論ずることにしたい。

［注］

1　怒りの表現「むかつく」を動詞として扱っている先行研究がある（たとえば、山岡 1999）。形態的にはたしかに動詞であるが、本来的な動詞ではなく、擬情語からの派生語である。「いらいらする」などと同じように、「いらいら」を述語として使えるようにするために、「～つく」という接辞を加えたものである。どのような感情状態を捉えているかという観点からは、その後の表わす過程あるいは様子が重要である。そこで、この稿では、「むかつく」「いらいらする」などは、擬情語として扱うことにする。

2　その中で、現代語の「おかしい」は、例外的に、２つの語義の間につながりを見出すのがむずかしいように筆者は感じるので別語としてもよいように思うが、３つの辞書『明鏡』『新選』『岩波』は、いずれも同一語としている。このことを見極めるには、歴史的にこの語の成り立ちを見る必要があると思われるが、それは筆者の手に余る。この稿では、ひとまず、「おかしい」は触れずにおくことにしたい。

3　感覚を感情に含める立場もある（山鳥 2008）。

［参考文献］

大曽美恵子（2001）「感情を表わす動詞・形容詞に関する一考察」『言語文化論集』（名古屋大学）22（2）：21-30.

伊藤正男・梅宮守・山鳥重・小野武年・往住彰文・池田謙一（1994）『岩波認知科学講座６情動』岩波書店

今井むつみ著、日本認知科学会編（1997）『認知科学モノグラフ ことばの学習のパラドックス』共立出版

楠見孝・米田英嗣（2007）「感情と言語」『感情科学の展望』（藤田和生編）京都大学出版会：55-84.

倉持保男（1986）「『腹が立つ』と『腹を立てる』」『国語研究論集』明治書院：702-720.

ダーウィン、チャールズ（1872）『人および動物の表情について』岩波書店（邦訳：濱中濱太郎訳、1991 年）

デカルト、ルネ（1659）『方法序説』岩波書店（邦訳：谷川多佳子訳、1997）

戸田正直（1992）『認知科学選書 21 感情　人を動かしている適応プログラム』東京大学出版会

馬場典子（2001）「怒りの直接表出表現『ハラガタツ、アタマニクル、ムカツク』の意味分析」『世界の日本語教育』11：195-207.

加藤由紀子（2001）「感情表現における動詞とその周辺」岐阜大学留学生センター紀要：47-59.

濱治世・鈴木直人・濱保久（2001）『新心理学ライブラリ 17 感情心理学への招待――感情・情緒へのアプローチ』サイエンス社

松中完二（2005）『現代英語語彙の多義構造―認知論的視

点から、理論編』白桃書房
山岡政紀（1999）「感情表出動詞の文法的特徴」9：47-59、創価大
山鳥重（2008）『知・情・意の神経心理学』青灯社
［辞典類］
金田一春彦（1978）「擬音・語擬態語概説」（浅野鶴子編（1978）『擬音語・擬態語辞典』角川書店：3-25）
尚学図書・言語研究所／編（1991）『擬音語・擬態語の読本』小学館
飛田良文・浅田秀子（1991）『現代形容詞用法辞典』東京堂出版
飛田良文・浅田秀子（2002）『現代擬音語擬態語用法辞典』東京堂出版